
俺とバカどもと幻想郷

サイクス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺とバカどもと幻想郷

【Nコード】

N0684Z

【作者名】

サイクス

【あらすじ】

ある者から追われ、瀕死の重症を負った神楽一族の生き残り。そして一部の記憶も失ってしまう。旅に出たその者の行き先はバカテスの世界！？他のオリキャラも出す予定です！
初めての作品で未熟なところもありますが、よろしくお願いします。

すべての始まり

それは・・・些細な出来事だった。

幻想郷にて

???「ハア・・・ハア・・・ハア・・・」

俺が気が付いたときはもう、体力も限界を超えようとしていた。
両手は血で染まっている。足もフラフラだ。視界まで霞んできやがる。

???「くそっ！このままじゃ・・・！」

追っ手1「いたぞ！逃がすなあ！！」

追っ手2「殺してでもそいつを奪え！！！」

ちっ、もう追いついてきやがった。あまり使いたくはなかったが・・・！

???「炎符『フレアグレネード』！！」

咄嗟に放った俺のスペルカードは火を噴き追っ手たちに襲い掛かる。
同時に俺の体から力が抜けていくのがわかった。
・・・調子に乗りやがって・・・！！だが。

「????「ッハハハハハ……まあいさ。ここで終わるのも悪くねえな。」

幻想郷での思い出が頭をよぎる。天狗のなんつったっけな……ああ射命丸だったか。そいつと競争したっけな。後、鬼の……伊吹萃香か。

そいつと力比べしたっけ……。全敗だったけど。

もう力が入らねえ。後は終わりを待つだけ……。

「????「フ……さらばだ。我が故郷……」

そう呟きながら俺は意識を手放した。

「（いいえ……あなたは終わらないわ。心がそう言っている……。）」

八雲邸

目が覚めたのは見慣れぬ一室だった。そして俺の頭に疑問が残る。

「どういうことだ？俺は確かに死んだはず……。」

『ナゼオレハイキテイル？』

？「あら、ようやく目覚めたのね。さすがは一族の生き残り。たいした生命力ね。」

？？？「あなたは・・・？俺を知っているようだが・・・。」

この家の主らしき女性がそこにいた。金髪の髪を下ろした綺麗な人だった。

紫「私は　八雲紫。あなた、名前言える？」

？？？「ん？あれ・・・・・・わからない。この幻想郷の最低知識以外

なにも出てこない。思い出そうとしても・・・・・・何もない・・・。」

紫「困ったわね・・・。名前がわからないじゃ・・・。」

考え込む紫、困ってるようなのである提案をした。

？？？「・・・あなたはさっき、『一族』と言いましたよね。一族と言っからには

何か苗字があるのでは？」

と、恐る恐る聞いてみる。え、何で敬語なのかって？
まあ、この人見るからに強そうだし。カリスマ、というかなんというか。

紫「ええ。あなたは古より伝わりし『神楽一族』。この幻想郷の中でも

トップクラスの戦闘能力と地位を持つ一族ね。」

それを聞いて俺は哑然とした。それって……

神楽(?????)「それって大昔に滅んだ一族ですよ。どういうことですか!？」

紫「それが生きていたのよ。貴方だけね。」

神楽「え……?~~~~~ッ!分からないことだらけだ!」

取り乱す俺を紫は優しく制する。

紫「落ち着いて。……そうね、まずは貴方の名前、考えましようか。」

それには俺も同意見だ。

どうか、崩壊的なネーミングセンスじゃありませんように……!

すべての始まり（後書き）

初投稿です！未熟ですがどうかよろしく・・・
えっと、更新スピードは不定期かもです。

次回は紫が神楽の名前を決める・・・のか？

第一問（前書き）

二話目です。

一週間に2回の更新を目指してます。

それでは、どうぞ！

第一問

八雲邸

紫「それで……あなたの名前だけど……あなたの髪と目、空色だから……」

『空護』なんてどうかしら？」

神楽「空護……か……うん、いいかもな。これから俺の名は『神楽空護』だ。」

あれ……意外とあっさり決まったもんだな。

どこぞの稗田さんみたいなネーミングセンスだと思ってたんだが。

（これは作者の勝手な想像です、お気になさらず）

紫「本当ならここに泊めてあげたいところだけど、生憎空き部屋がないのよ……」

だから、私が泊まるところを探してあげるわ。」

空護「そうか、それは助かるよ。すまないね。」

そついうと紫はお馴染みのスキマ空間を開ける。

その時、俺の頭に違和感があった、いやできたといった方が正しいか。

これは……境界移動の知識が俺の頭に……流れ込んで来る……！！

空護「ちよつと待つて。」

紫「何？」

空護「2つ確かめたいことがあるんだ、いいかな？」

紫「ええ、構わないわ。」

と、紫も承諾してくれたところで、俺はさっきの知識を元に紫と同じ境界を開く動作を試みる。

すると案の定、紫と全くとまではいかないが、同じ境界が開いた。

紫「！・・・あなた・・・その能力！やはり神楽の血を引いてるだけはあるわね。」

驚愕に目を見開く紫、無理もない。自分特有の力が他人に易々と使われたのだ。

驚かないほうがおかしい。

空護「紫の境界を開く動きを見たら、頭に情報が流れ込んできたんだ。」

それと、二つ目だけど、俺の刀、知らないか？2本あるんだけど。」

紫「ああ、あれね。今持つて来させるわ。・・・藍？例の刀持つてきて頂戴！」

藍「はい、ただいま。」

しばらくして、藍と呼ばれた女性は確かに俺の刀を持ってきてくれた。

空護「君が藍だね、俺は神楽空護だ。よろしく。とにかくありがとうな。」

藍「いえ、お気になさらず。」

紫「2人ともいい雰囲気のところ悪いk」どこがだ！（ですか！）「分かつてるわよ・・・」

それで？2つ目は？」

空護「ああ、俺が覚えてる限りは、神楽一族は皆、2つ能力を持つ、と

教えられた記憶があるんだが？」

ん？いつの間に敬語じゃなくなつたって？まあ、危険な奴じゃないことは確かだし、

第一俺は、堅苦しいのは苦手なんだよ。

紫「その通りよ、あなた少し記憶が戻って来たんじゃない？つと・・・質問の答えね、

あなたの言う通り神楽一族は、必ず、2つ能力を持つよ。そして、

あなたの能力が今で目覚めた。」

なるほど、俺の勘はあってたわけだ。そうするあとは・・・

空護「能力の名前・・・どうするかな？」

紫「そうね……『ありとあらゆるものを学習し使役する程度の能力』」

なんてどうかしら？」

長いな……。ま、でもいつか。とりあえず身を守る術はできた。

紫「さて、そろそろ行きましようか。藍に頼んだ結果だけど、守矢神社。

そこが引き受けてくれるそうよ。」

空護「そうか、何から何まですまないな。……んじゃ、行つてくる。

またここに来てもいいか？」

紫「ええ。いつでも歓迎するわ。」

にこつと笑顔を浮かべる紫。……やべ、かわいすぎる／＼／

そして俺は境界を開き中へ入った。

第一問（後書き）

次は、プロフィール紹介でもしよかなと思います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0684z/>

俺とバカどもと幻想郷

2011年12月5日20時52分発行